

No. 1167

金魚の里

— 愛知・弥富 —

立夏もすぎていよいよ夏、夏の風物詩・金魚。

愛知県・海部郡弥富町は奈良県の大和郡山、東京江戸川と共に金魚の産地として名高い。養殖業者は300軒を越え、年間900万匹を生産する。低湿地地帯で沼や小さな川が方々に走り、金魚のエサになるミジンコなどがたくさんいるなど、地理的条件に恵まれ、金魚養殖150年の歴史を持つ。

弥富町には三つの市場があり、月水金の3日間はセリ市が開かれる。大きな池に20種類の金魚がカンコと呼ばれる木箱に入れられセリを待つ。全国各地から集まった仲買人が参加してセリが始まる。ランチュウ一匹に何千、何万の値がつくかと思えばぎゅっしり詰めこまれたワキンは4～5円。陽気な立ち会いの割に、もう一つ気合が入らないのは、この業界にもこのところ景気の落ち込みが反映してのこと。しかし、夏が近づくとつれ、売れ行きもだんだん伸びて来た。

人間国宝

型絵染に生きる

みごとに造型美と日本古来の落ち着いた、美しさをみせる伝統工芸、型絵染。

型紙を用いる模様染にはいくつかの手法があるその中で型紙染の第一人者として創作活動を続けている鎌倉芳太郎さん、戦前鎌倉さんは沖縄美術工芸を熱心に調査、研究、大きな業績を上げた。昭和31年には国の無型文化財に指定された。

鎌倉さんの話「私は沖縄の染色技法、紅型の良さに興味を持った。造型美だけでなく詩情がなければいけない。私は型絵染に万葉の心を表現したい、それが心のささえになっています。」

型絵染は模様を創作し、型紙を彫り、糊置き、染め上げるまで一貫して行う。ていねいに色を重ねていく。色置きの作業には特に神経を使うという。色の置き具合にも鎌倉さん自身の工夫が加えられ、形式にとらわれない、自由な色彩が表現されていく、ほかの模様染に比べて独得な味を持つ型絵染、その伝統工芸をふまえて新たな発展をみせるものと注目されています。